

中上健次 『一番はじめの出来事』

—— 秘密 による救済 ——

佐藤綾佳

はじめに

『一番はじめの出来事』は、一九六九年『文藝』八月号に発表された中上の文壇処女作である。中上は、この作品を発表するまでに五つの作品を『文藝首都』に発表していたが、商業雑誌での掲載はこれが初めてであった。『一番はじめの出来事』以前に発表された作品は、薬や酒に溺れるフーテン生活を送る若者を描いたものばかりだった。そのような中、描かれた『一番はじめの出来事』は、中上作品において切り離すことのできないモチーフである血縁を描いた初めての作品である点からとても重要な作品だと言える¹⁾。だが、この作品について先行研究はほとんどなされていない。

『一番はじめの出来事』の主人公・康二はとても感受性が鋭く想像力豊かな子供である。そのような康二は多

くの「不安」を抱きながら、仲間と共に 秘密 を創っていく。この 秘密 は康二の「不安」を解消する為の装置である。本稿では、康二の「不安」とは何か、そして、 秘密 がなぜ康二を救済する装置と言えるのかについて明らかにしたい。

一、康二の感覚

まず、康二の感受性の鋭さや豊かな想像力の有り様について確認したい。

運動場に入れたばかり赤土の形をみて、いろいろな動物を想像していた。赤い象のようにもみえるし、赤いライオンのようにもみえる。僕は、そして、突然教室中にひびわたるような声をだして、「馬が走っとる！」とどなったのだ。みんな僕の声におどろいて、わあ、と言って声をだし、窓際に駆け寄った。でも赤い馬は、僕にはみえても、他のやつらにはみえない。(…中略…)それから約十分ほど経ったあと、僕の三つ前に坐っている秀が、「戦車や！戦車がきた！」と僕の時より二倍くらいおおきな声をだして叫んだのだ。(…中略…)僕は柿の葉やあけびの葉どもにまといついている光を、ふるいおとそうとするみたいに木刀で枝をたたきながら、秀を呼んだ。「おまえに赤土、戦車にみえたんか？」

「赤土？」

秀は僕の質問の意味がわからなかつたらしく訊き返し、不意に黙りこんで僕たちの作業場のほうに歩いていく。

康二は、赤土に象やライオンや馬を見ているが、秀や同級生には康二のように赤土を馬と見ることはできない。さらに、康二と同様に叫んではいても、この会話から秀は赤土に気をとめていなかったことがわかる。また、草木が生き物のように木がダンスしているように揺れていると康二のみ見ている場面があるなど、康二が感受性の豊かな眼で自然を見ている描写が多くある。自然を擬人化し他人とは違う見方で捉えることができる康二は、他の子供と比較すると感受性が極めて鋭く、想像力に富んでいると言える。

二、最大の理解者と「二セの僕」

感受性の鋭さや豊かな想像力は、不意に康二に自身の名前に対する疑問を抱かせる。

なぜ僕と兄の名は母の兄つまり僕の伯父たちの名前に似ているのだろうか？と考えた。(…中略…) **康

一、**康二は、 康一郎、 康次郎のものまねだ。(「家」・二十頁)

この箇所について、四方田大彦は「無意識裡に兄を祖型と見なす『僕』は、複製としての自己同一性のあり方に奇妙に心を躍らせているのである。」⁽³⁾と述べている。だが、康二が複製としての存在に対し心を躍らせているとは言い難いのではないだろうか。また、守安敏司は「嘘の父ではなく実の父への想いに連なっている」⁽⁴⁾としている。しかし、康二の名前は母の兄と連なっている為、実の父に対する想いは抱かないと考えられないだろうか。では、ここで言われていることは何であるだろうか。名前はアイデンティティを形成する上で重要であり、自己の存

在を確立し、確固たる存在であるか確認する記号である。その名前が伯父に似ていることに康二は気が付いたのだ。アイデンティティを保証する名前がものまねであることは、康二が確固たる自己を持つことができないことを示している。その為、ここでの康二は心を躍らせておらず、また実の父への想いも抱いてはいない。康二はアイデンティティの確立という大きな問題を背負い「不安」を抱いているのである。

さらに康二は家のあり方においても「不安」を抱く。「嘘の父」である義父の出現により、母系一族ではない「家庭」という別の家族の形ができ、母系一族は崩壊の危機に立たされる。そのような中、康二は母系一族で暮らしたいという想いを心の奥底に持つのだが、この想いを理解する者はおらず、康二は孤独を抱えている。例えば、母が「家庭」で暮らすことを望み、兄を父代わりとする母系一族で母親らしいことをしないといけないのかと言っている以上、康二が望む母系一族のみで再び暮らすことはない。また、義父の家で共に暮らしていた姉は家から出て行き、母系一族を解体させようとする。この姉が義父の家から出て行く端緒を作った者は兄だ。兄は母の再婚の「家庭」から疎外された被害者ではあるが、母系一族を再生させようとはせず、母系一族の戻る家を鶏舎のように壊してしまった。このように、彼らは康二が守りたい母系一族を再生させるところか崩壊させていく為、康二に「不安」の種を植え付けたのだ。そして、誰も母系一族を守る考えを持っていないことに康二は孤独を感じる。そこで、康二は「不安」と孤独を紛らわす為^⑤に、自分と同じ考えを持ち、不安がっている男の子が遠い星に住んでいると想像する。現実世界に理解者がいない孤独な康二にとつてこの男の子は最大の理解者となり、安心をもたらすのである。

谷田先生は銀河系の中にはまだたくさん太陽があり、それらを中心にした地球がたくさんあると言った。

そこに僕とそっくりおなじことを考え、不安がっている男の子がいて、(…中略…)

* * 康二さんやつとめぐりあいました空はうんとひろいですね僕たちはまるで不安やわけのわからない混乱の中で生活をして年をとっているようなものですねあ不満だ* * 康二さん僕が宇宙そのものだったらどれほどいいかと思うんだつまり僕も君もいっしょになっちゃうんだあでも僕は僕だすぐ返信して下さい。

ヒトデ太陽系ザリガニ星 より

(「家」・二十一頁)

康二は最大の理解者として創造したヒトデ太陽系ザリガニ星 から送られてくる手紙を想像する。この手紙は、ヒトデ太陽系ザリガニ星 の言葉を借りて、康二の考えを代弁していると考えられる。「僕たちはまるで不安やわけのわからない混乱の中で生活をして年をとっているようなものですね」とは、誰からも理解されない「不安」、そして、母の再婚により生じた家族の複雑さによる混乱の中で生活し続けなくてはならない過酷な状況に置かれた康二の「不満」を指した言葉だろう。つまり、康二は義父との生活に「不満」と「不安」を抱いているのだ。このようにヒトデ太陽系ザリガニ星 は、康二と同じ考えを持つ最大の理解者として康二を孤独から救うのである。だが、渡邊英理はこの手紙を僕の無力さと、それを分かち合う相手との決定的な時差によるすれ違いを描いていると述べている。しかし、誰も康二を理解しない世界に追い込まれている時に、この手紙は康二の無力さを示し、ヒトデ太陽系ザリガニ星 との時差は関係ないと考える。ただ、康二の意識の裡にヒトデ太陽系ザリガニ星 がいるだけで康二は満たされるのだ。なぜなら、この「うんとひろい」宇宙の中に康二の最大の理解者がいると信じることで、康二に安らぎをもたらすからだ。

そのような中で、康二の想像力は正の方向のみではなく負の方向へも働き、康二の存在を脅かす「ニセの僕」を新たに生み出してしまふ。

あの列車に乗っている僕と同じ年齢で、同じ顔や体をしていて、同じ*康二という名前をもったニセの僕を想像してみた。ニセの僕がここを竹中にむかって歩いていて、ほんとうの僕があの汽車に乗っていたとしたら、ニセの僕もやっぱりこんなふうに考えてしまふだろうか？

（「川」・三十一、三十二頁）

この「ニセの僕」について渡部直己は「ニセ」意識はまだ一種の防御機制として作用していた。少なくともならば以上、その意識は、あたりに押し寄せる世界の邪悪な表情をやり過ごす為の知恵として、幼い主人公の身に親しいものだった。⁽⁸⁾と論じている。確かに、兄が康二を殺そうとする場面で「劇」を演じていると思ふことは現実逃避をしようとする康二の「防御機制」と考えてもよいだろう。だが、この箇所では康二が生み出した二人の人物であるヒトデ状太陽系ザリガニ星 と「ニセの僕」との対比に着目すべきではないだろうか。「ニセの僕」の存在は、アイデンティティを形成できず、確固たる自己を確立できない康二にとって自己の存在を消滅させたたり、康二の立場を奪ったりする可能性を孕んでいる。「ニセの僕」と「ほんとうの僕」との違いがわかる者は康二のみだ。仮に、「ニセの僕」が「ほんとうの僕」を侵食し消滅させてしまったとしても、兄も姉も母もそのことが付かないだろう。この引用箇所は、「ニセの僕」も「不安」を抱いており自分だけが「不安」を抱いているのではないという安心感を描いたものではない。ここでは、「ニセの僕」という存在を描くことによつて、「ほんとうの僕」の存在が如何に危ういものであるのかを強調し、自身が消滅する恐怖が描かれていると読

むべきだろう。

三、自己の存在確立と消滅に対する「不安」

康二は自己の存在を確立することができない。その原因の一つとして前述したように名前の問題が挙げられる。康二の名前は母の兄と似ていることから、母系の繋がりとと言える。「「という母系の名字を名乗らないにも関わらず、名前のみが母系の繋がりであることは、* * * 康二」というアイデンティティの記号である名前が「家庭」と母系に引き裂かれていることを意味している。その上、実生活においても康二には母の再婚によって作られた「家庭」から疎外された兄との交流が残っている為、母系と「家庭」とが混在する渦中に康二は置かれている。このように、アイデンティティの形成の場であり、これまで自己の存在を守ってくれた母系での生活から切り離され、理解してくれる者のない「家庭」に入ること強いられた結果、康二は自己の存在を確立できなくなってしまったのである。康二個人を見ても、さらに個人から一段階広い家族という世界に出ても母系と「家庭」が混在し、自身が引き裂かれることによる「不安」から康二は逃れられない。この「不安」を解消したいという康二の想いは、ヒトデ状太陽系ザリガニ星の自身が唯一無二の存在であると主張する「僕は僕だ」ということばに強く表れている。

自己の存在を確立できない康二の「不安」は、自身の存在が弱体化し消滅してしまうのではないかという危惧へと発展する。その「不安」によって「ニセの僕」を康二は生み出してしまった。また「ニセの僕」による「ほんとうの僕」の侵食だけではなく、闇に同化するごとにより康二は自己の存在が消滅してしまう恐怖も抱いている。

ふたたび眼をとじる。まるで体が家のなかの闇にとろけてしまって耳だけになったように、屋根にあたる雨の音をきいている。雨だ。僕は体を固くしたまま、雨のふっている外界といっしょになってしまったように、どこからかわきあがりはじめた不安を感じとめた。

（「雨」・五十四頁）

ここでは、闇の中で耳だけになってしまふ感覚を持ち、耳だけになった康二はより注意深く雨音を聴くこととなる。そして全神経を使って雨音を聴くうちに、外界に飲み込まれ、消滅してしまうと感受性の鋭い康二は感じている。さらに康二は、気付かないうちに消滅してしまうことに対する恐怖も抱く。

僕が一番恐いのは、眠っている最中、なにもわからないままに死んでしまうことだ。（「雨」・五十八頁）

これらから、康二が自己の存在の消滅に対する強い「不安」を抱いていることがわかる。だが、同化や死による消滅のみが康二に「不安」を抱かせているのではない。

新宮の**康二、和歌山県の新宮の**康二、それから日本の和歌山県の新宮の**康二、太陽系地球日本国和歌山県新宮の**康二、ずっと言っていくと僕はわからなくなる。（「家」・二十頁）

康二は思う。とその上、小学一年生のときに祖母の葬式の為に汽車に乗ったエピソードが敢えて描かれている為、このとき以外、康二は新宮の外へ出ていないと考えられる。そこで、康二にとって身近に感じられる一番大きな

世界は新宮だと言えよう。そこから太陽系まで視野を広げることによって、新宮が如何に小さな世界であるか感じる事が可能だ。「ずっと言っていくと僕はわからなくなる」ということばと先に挙げた康二の想像上のヒトデ状太陽系ザリガニ星の手紙にも描かれるように、宇宙的規模から見た康二のちっぽけさが示すように、康二が広い世界でどれだけちっぽけな存在であるかを浮き彫りにし、ちっぽけであるがゆえに消滅してしまうのではないかという康二の「不安」は一層強まるのである。

四、「不安」を解消する 秘密

「不安」を解消する為にはどうすればよいか。康二の気持ちを代弁しているヒトデ状太陽系ザリガニ星のことはを再び見てみたい。「僕が宇宙そのものだったらどれほどいいか。ここに表れているように、混乱の中、康二の最大の理解者であるヒトデ状太陽系ザリガニ星が宇宙そのものとなれば、康二を包み込むように常に傍にいてくれることとなり、康二は孤独を感じる事がなくなるのである。この宇宙のように康二を理解し、裏切らず、包み込んでくれる存在、それが康二ら子供の手によって創られる「僕たちの秘密」である。康二は所属したいと望む母系一族から大人によって引き離され、安住の場でない「家庭」で暮らすことを強いられた。その為、心と身体が引き裂かれてしまい「不安」を抱かざるを得なくなつた。そのような康二にとって、自らを守ってくれるであろう秘密はその「不安」から逃れることのできる唯一の場所ではないだろうか。さらに、秘密の主となることは自己の存在の小ささという康二の「不安」の一つが解消される。

秘密を創り始めるとき、康二は計画の進行を促す刺激剤として、焼夷弾で焼けた家を建て直す為、兄が終

戦直後、街の不良分子を集め陣頭指揮をとり、大工を雇い新しい家を建てた話を仲間に行っている。康二は「秘密」を創ることによって、家を建てた兄の行為の反復をしているのではないだろうか。まだ子供だった兄が建てた家は康二ら母系一族を守る存在であったに違いない。母系一族を守る為の家を建てた兄の行為を模倣し、康二は崩壊の危機に直面している母系一族を救おうとしていると読み取ることが可能だ。だが、兄が子供ながら母系一族を救うことが可能であったのは、父代わりとして権力を持っていたからである。現在、康二には義父がいるが、「嘘の父」と思っているように、義父を家長とは認めておらず、康二にとって一族の長は兄である。兄のように一族の長にならなければ、「秘密」を兄が建てた家のように家族を救済する場には出来ず、「秘密」は子供の遊びに留まってしまふ。そこで、「秘密」を救済の場とする為には、康二が一族の長になる必要がある、兄の存在が障壁となっている。ここで見られるのは一種のエディプスコンプレックスである。康二は兄の権力に反発し、兄の家に泊まらず、嘘をつくなど慕っている兄を裏切る行為を行うが、兄は康二の嘘を見破っても康二を責めることはない。母に裏切られ「家庭」から疎外された兄にとって康二は唯一の家族と呼べる存在だったのだろう。兄を裏切る康二の行為は兄に精神的苦痛を与える結果となったが、母系一族を救済する為に康二は兄を裏切らなくてはならないのである。

次に、康二の「不安」の原因の一つである大洪水の話を見てみる。大洪水の神話は世界中に存在する。『ギリシア神話』や『旧約聖書』における洪水神話では、大洪水によって人類の悪を全て消滅させるが、神は正しいとした人物とその家族だけを救っている。『一番はじめの出来事』において悪を持ったとされる人物は、康二らに危険をもたらす兄ではないだろうか。酒に酔い、康二ら「家庭」に住む者を殺そうとしたとき兄は、康二に身の危険をもたらす存在である。康二に関心を持たないが危害は加えない義父と、血は繋がっているが康二に危害を

もたらす一面を持つ兄では、洪水神話の考え方から見ると消滅させるべきは兄だ。さらに「僕たち四大家族、母と姉と僕と父」と描かれており、康二が思う家族に義父が入り兄は入っていない。但し、この箇所が馬鈴薯を探りに行った話の為、食事を共にする者を家族と呼んだ可能性は否定出来ないが、康二が義父との「家庭」を家族と認識していたことは確かであろう。そうすると、洪水から救う人物も義父となるはずだが、この作品には前述したように母系一族と「家庭」と、二つの家族が存在していることを忘れてはならない。これを踏まえて大洪水から救われる話を康二が思い描いている箇所を見てみる。

洪水がきたらここへ逃げてこようと思った。秘密 をあのサイレン塔より高くすれば、僕もそれから仲間も僕の母も兄も姉も生きのびれるはずだ。
 (「秘密」・十六、十七頁)

いまこの春日町や野田町にふっている雨が、朝になっても夜になっても次の朝になってもふり止まず、竹中の川が氾濫して海と呼応して大洪水をおこそうとも、その中に避難すれば兄も姉も母も仔犬も救かることのできる新宮で一番高い 秘密 だ。
 (「雨」・五十三頁)

この二つから、康二が大洪水から共に救かりたい家族は、母、兄、姉であり、洪水神話の考えを覆し、悪の存在ともなってしまう兄を救うのである。したがって、康二にとつての家族とは義父との「家庭」ではなく血で繋がった母系一族なのである。さらに康二は、兄がもらってきた仔犬のペストが仔犬を産んだら、全て 秘密 で飼おうと考えている。そして、ペストとその仔犬を蛇島に住んでいる輪三郎が飼っている猫と戦争させて、ペストが

勝てば、ペストは 秘密 のある山の女親分になり、山を 秘密 の国に変えてしまえると思像する。つまり、秘密 は母系の血縁によって構成される国になるのである。ペストとその仔犬で構成される 秘密 の国は康二らの母系の共同体の比喩と読め、秘密 は母系の象徴といえる。母系一族と「家庭」とに引き裂かれた「不安」を抱き続ける康二にとって、秘密 は再び母系の血で繋がる血縁共同体で暮らすことのできる理想の空間となり、「不安」を解消させる装置となるのである。

この 秘密 は「残虐で、暴力的でやさしさにみちている」とされている。「残虐で、暴力的」と「やさしさ」は正反対のことばである。前述したように、秘密 は康二にとって「不安」を解消させる理想の空間であるにも関わらず、なぜ「残虐で、暴力的」なのであろうか。

僕のうちふるうくわで、草むらの間から黒く濡れた土が皮膚をめぐられた動物の肉のようにあらわれ、に
おいを発散した。
(「川」・二十九頁)

一本一本の杉の枝が、体からひきちぎってきた人間の腕みたいに樹液を流して、乱暴に扱ったびに、じん
じん襲う痛みに耐えかねて指を痙攣させているようだ。切りとった一万本の腕でつくった僕たちの 秘密
の壁。
(「犬」・三十八頁)

このように 秘密 を創造する過程を土や木に対する暴力として擬人化して描いている。その上、康二には木がダンスしているように見えていた⁹⁾ことから、切断した枝が腕に見えたのではなく、人間の腕を切断していると描

いているのだ。このような「残虐で、暴力的」な行動をとるに至つた原因は、康二の置かれた家族環境だろう。母の再婚により康二は義父との「家庭」に入れられたが、そこへ康二の慕つ兄が入ることが許されなかった。母系一族を守りたい康二の意に反し、母系一族での生活は壊され、康二はそれを受け入れきれない。そのような中、兄が康二らを殺そうとする事態まで起こつてしまふ。この時、康二は「みんな嘘だ」と思つのだが、この想いは、兄が康二らを殺しに來た悪夢のような出来事に向けられたのではなく、義父と暮らす「家庭」に向けられた想いである。なぜ、義父と暮らす「家庭」を嘘と思つのか。この時、康二は次の想像をする。

僕はみんなで劇をやっているような感じを抱いた。ほんとうの母とほんとうの父と、おおきくて強い兄と、賢い姉と、僕の五人でつくる、平凡な家庭があつて、金曜日の夕食後、深刻だが間の抜けた劇を、演じている。いま僕らは仮面をかぶつて、それら各々の役割に合つた服装をつけた名俳優たちなのだ。

（「果実」・五十二頁）

これは康二の理想の「家庭」である。康二の父の死後、兄が父代わりとして暮らす母系一族での生活は、康二に安心をもたらししていた。だが、母の再婚により康二を理解しようとしないう義父（嘘の父）と暮らさなければならぬ「家庭」は康二にストレスを抱かせた。その為、理想の「家庭」を「劇」という形で想像することによって、現実逃避を行ったのではないだろうか。だが、そこでもストレスを昇華できなかった。家族の中で一番弱い立場にいる康二がストレスのはけ口として抱いた攻撃的な欲求を、自分より弱い人間に見える草木に向けた為、秘密を創る際の「残虐で、暴力的」なイメージが生まれたのだと考えられる。このように康二らの手によって

「残虐で、暴力的」に創られた「僕たちの 秘密」は、大人の支配から逃れられる場であり、主である康二を裏切らない。母系一族と「家庭」とに心と身体が引き裂かれ「不安」を抱いている康二にとって、秘密は「不安」から解放してくれる場所だ。さらに、大洪水から母系一族を救うであろう 秘密 は母系を象徴し、母のような「やさしさ」で康二を包むことができるのである。

五、兄の自殺

秘密 を中心として、康二の「不安」が生み出した想像の世界が描かれていたが、作品の終盤に起こる兄の自殺によって大きく作品の雰囲気が変わる。兄の自殺により康二の意識は 秘密 から離れ、現実的な世界へと移行していく。兄の自殺が突然のものであるかのように描かれているが、兄の自殺は何の前触れもなく起こったのではない。兄が幻聴として聞いている大魔王の話や兄が康二らを殺そうとしたことが自殺の前兆だったのでないだろうか。大魔王は康二ら一統を裏切り者であると言っており、兄はいつも見逃してくれるよう頼んでいた。だが、この大魔王の指令が兄の幻聴である以上、その指令は兄の心の声である。兄は、「家庭」から疎外されたことに対して康二らを許すことが出来なかった反面、これまで守り続けてきた母系一族を守りたいという感情にも捕らわれ、苦しんでいたのではないだろうか。大魔王からの「セキニンヲトルタメニ、ホントウニクビヲククルノダ」という指令に、兄が「O・K」と答え首をつつたのだと康二は想像する。康二らを許すことが出来ない兄は、康二らを殺そうすると同時に、裏切り者である康二らが大魔王から守る為に一族の長として自殺したのだらう。康二は兄の死に対し、

なぜみんなは兄が生きている時に泣いたりしなかったのに、今日の朝になると死んで動かなくなり無言のまま変色した兄になると、急に泣きだしたりするのだろうか？僕は全然悲しくないし、首をつって死んだからと言って泣いたりなんかしない。

（「山」・六十八頁）

と思い、母や姉たちが泣くことを理解できない。悲しくなく、泣いたりなんかしないと康二は思っているのだが、秘密　へ向かう山中で兄の安置されている家を見ながら涙を流し、再び　秘密　の前で涙を流す。兄の死を全然悲しくないと思っていた康二が、秘密　へ向かう山中で家を見て涙を流し、さらにこの涙が「ぬくい涙」であることに意味がある。この表現は悲しみではないだろう。作中に描かれる「ぬくい」という表現は、「ぬくい闇」が充滿はじめると同時に幽霊がはい出してくると思ったり、暗闇の中「不安」を感じた時に「ぬくい涙」を流したりすることから、康二が「不安」を感じている時に使われていることが言える。よって、この涙は「不安」の涙である。なぜなら、母系を救う為に康二が一族の長になるには兄の存在が障壁となっており、消えることを密かに願っていた為、兄を殺してしまったと康二の中で罪の意識が芽生え「不安」になったのである。それは、「首をつって自殺をする」ということにははずかしいことだ。このことは得意になって仲間たちにはなすことではない。「との康二の兄を殺してしまったことを仲間にも悟られたくない」という想いの深層からも読み取れるのである。

兄の自殺によって康二の　秘密　に対する想いは変化したと考える。康二が山から家を見た情景が「僕の家の物置小屋と改装したばかりの風呂場がみえ、それらの屋根がまあらしく黒くひかっている。」と描かれている。この屋根のイメージは　秘密　にブリキ板を置き、遠くからでも光っている様子を見ることが出来るという想像

と類似している。つまり、この時康二の中で 秘密 の機能は家に移行したのだ。その為、康二は 秘密 で飼おうと考えていたペストの一族を家で飼おうと決意するのである。

僕はこの犬がおおきくなって産んだ仔を、誰が反対しようと全部家で飼ってやるのだ。そうして、家は、母が心配するようにペストを頭とする犬の集団によって占領される。

（「山」・七十頁）

ここから康二が兄を模倣しようと考えている点を見て取ることができる。さらに、ここには模倣だけではなく、母系一族の再生の場を家に移した意味も含まれているのだ。一族の長に昇り詰めた康二には、子供の遊びに過ぎない 秘密 は必要なくなつた。その為、最後、仲間と共に 秘密 の建っている山に続く輪三郎の小屋に火を放とうとしたのだろう。秘密 を無くしてもよいのは、康二が一族の長になることが出来、子供ではなくなくなつたからである。仮に、兄が自殺する前にこの遊びを仲間が提案していたら、秘密 が燃えてしまつと母系一族を救済する望みが叶わなくなる為、家のほうに火がいくか考えるまでもなく康二はやめるように言うであろう。「子供がおおきくなるのには嘘の生活以外にながめるのか？」と康二が疑問を抱いていることからわかるように、大人になれば嘘（秘密）は必要ないのである。康二はこのように想つた直後、「僕は大人っぽく手をはたき」と大人に近づいたのだという行動を取っている。そして自らを「賢い子供」とすることは、康二が「嘘つきの子供」から抜け出したと言っているのだ。つまり、秘密 は、母系一族の救済の場ではなく、多くの「不安」を抱かせられた康二の心を救済する為の装置だったのである。

おわりに

康二は感受性が鋭く想像力に富んでいるがゆえに、自己の存在の確立に苦しみ多くの「不安」を抱いている。秘密は母系一族の再生の為、康二が兄の模倣をし創っていた場所である。だが、兄の死によって一族の長になることが出来た康二は、母系一族の再生の場を家へと移行させた。つまり、秘密はそれを創造する行為が康二の「不安」に満ちた心を救済していることから、母系一族ではなく康二を救済する装置であったと言える。なぜ、中上は兄の自殺という康二の救済からかけ離れた出来事を描いたのだろうか。それは、母系一族と「家庭」とに引き裂かれた康二の物語を描き進めるにあたって、その姿が自身に重なり、呪縛のように捕らわれ続けた兄の自殺を避けては通れなくなってしまった。そして、自身の中に押し留めておくことが出来なくなった兄の自殺というモチーフが、康二の救済というモチーフを押し除けて作品の前面に出て来るに至ったのだろう。それ故、前半部と後半部との整合性が取れなくなってしまった。だが、この整合性のなさは未熟な作家だからこそ許されたのであろう。これら二つのモチーフを描くことは中上にとって大きな冒険であり、また、文壇処女作品だからこそ描かなくてはならなかった。そして、この二つのモチーフを描ききることによって、中上は今後の創作活動で重要な位置を占める兄の自殺というモチーフを発見したのだ。これらから、「一番はじめての出来事」は中上の文壇処女作に相応しく、その後の中上作品における基盤となったと言えるよう。

- (1) 『一番はじめの出来事』の前作『日本語について』は、学生運動やベトナム戦争といった、当時、注目を集めていた題材を取り上げた作品ではあるが、これは作家として注目されようとの想いから意図的に選んだテーマではないだろうか。この作品は群像新人文学賞の最終選考において野間宏から「大江健三郎の影響が、はつきりと見てとれる作品である。」と独自性の不足を痛烈に批判された。この批判に応答するように、「一番はじめの出来事」は創作された。当時、庄野潤三の『夕べの雲』や黒井千次の『走る家族』を始めとして多くの文壇作家が家族小説を発表したが、その多くは、高度経済成長期、地方から都市部へ出てきた者の寄る辺のない「不安」や、サラリーマンという組織において換えのきく歯車の一つであるに過ぎない立場から生まれる「不安」を描いたものであった。そこでは、子供が登場するとしても脇役であり、さらに彼らは親元で大切に育てられ、自分の存在を脅かされるような「不安」とは無縁であった。それに対し、「一番はじめの出来事」では子供が主人公であり、「不安」を感じている人物は子供である。また、他の作家が父系の家族を描いているのに対し、この作品は母系一族を重視している。これらの点から、本作は当時の文壇の動向を意識しつつも、中上ししか書き得ない舞台やテーマを選んで書かれた作品だと考えられる。
- (2) 「こいつらはダンスするみたいに揺れとる」
- 僕はあけびのつるがおおいかぶさっている柿の枝を木刀でたたきながら、秀の顔をみた。幹が胴体で、根が足で、枝が腕で、小枝が手で、葉っぱが指みたいだ。秀は僕の言葉がわからなかつたらしく黙ったまま柿の木の頭のほうをみあげて、
- (3) 四方田犬彦「五衰の悦び」(『貴種と転生』、新潮社、一九九六年)
- (4) 守安敏司「一番はじめの出来事」と「十九歳の地図」(『中上健次論 熊野・路地・幻想』、解放出版社、二〇〇三年)
- (5) 康二らの住む家の中から聞こえてくるラジオの音は家族の温もりを想起させる。康二と兄が家の外にいる時に取えて家の中のラジオの音を聞かせることは、兄が「家庭」から疎外されたことを強調していると考えられる。

(6) 次の会話に見られるように他の家族同様、義父も康二への理解を持つとうとしない。

「うるさい、五年生にもなつといて、泣くな」

父がどなった。母は僕の顔をみると荒い息を吐きながら自分のそばに坐らせ、「何言つとるの？ あんたにこの子の泣く気持ちかわかるん？」と言った。「あんたは人のことみたいに思つとるかしらんけど、わたしがどんなにつらいかわかるん？」

「そんなことがなんで俺にわかる？」

「なんでわかってくれるようにせんのか？ 夫婦やったらなんでわかるようにせんのか？」 (「果実」・五十一頁)

(7) 渡邊英理「僕が大人になるための秘密 中上健次『一番はじめの出来事』」(「叙説」13、花書院、二〇一六年)

(8) 渡部直己「中上健次の過激な「交錯線」」(「かくも繊細なる横暴 日本「六八年」小説論、講談社、二〇〇三年)

(9) 前註(2)

(10) ペストを飼い始めた頃、ペストが産んだ仔犬を全て家で飼つても良いか母に訊いたのは、兄の自殺の前から康二が兄の行為を模倣しようと考えていた証だろう。

【付記】中上健次『十九歳の地図』(一九七四年・河出書房新社)を底本とした。